

修士論文（要旨）
2018年7月

学部留学生の学びの変容
ー学内外の参加場面に着目してー

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
216J3903
馬文林

Master's Thesis(Abstract)
July 2018

Changes in Learning Style among Undergraduate International University Students:
With Emphasis on Participation in on-and off-campus Events

WenLin Ma
216J3903

Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F.Oberlin University
Thesis Supervisor:Yuko Miyazoe-Wong

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	アカデミック・ジャパニーズの定義	3
2.2	学部留学生における困難についての先行研究	3
2.3	学部留学生の学びを通しての変容についての先行研究	4
2.4	学部留学生の学外での参加を通じた学びについての先行研究	5
第3章	調査概要	8
3.1	調査方法	8
3.2	調査対象者のプロフィール	8
3.3	分析方法	8
第4章	学内の活動への参加を通じた学びの分析	10
4.1	来日経緯	10
4.2	大学生活への期待と不安	11
4.3	学習面の困難	12
4.4	ゼミでの活動	14
4.5	大学内での日本人との交流	16
4.6	問題解決方法	18
4.7	自己評価	20
第5章	学外の活動への参加を通じた学びの分析	23
5.1	アルバイト先での困難な点	24
5.2	問題解決方法	25
5.3	アルバイトで学んだこと	27
5.4	日本での生活体験	29
第6章	学内の活動への参加を通じた学びの考察	31
6.1	来日経緯	32
6.2	大学生活への期待と不安	32
6.3	学習面の困難	33
6.4	ゼミでの活動	34
6.5	大学内での日本人との交流	35
6.6	問題解決方法	36
6.7	自己評価	38
第7章	学外の活動への参加を通じた学びの考察	40
7.1	アルバイト先での困難な点	40
7.2	問題解決方法	40
7.3	アルバイトで学んだこと	42
7.4	日本での生活体験	43
第8章	総合的考察	45
8.1	学内外の参加を通じた学びの変容	45
8.1.1	学び方と問題解決能力の向上	46
8.1.2	日本語能力の向上	46

8.1.3 異文化適応能力の向上	47
第9章 まとめと今後の課題	48

参考文献

巻末資料

近年、グローバル化が進み、日本へ留学する人が年々増えており、日本学生支援機構の調査によると、平成 28 年度日本国内の留学生数が 239,287 人に達したという。その中でも中国からの留学生が最も多く、41.2%を占めている。また、平成 27 年度の調査では学部留学生が 67,472 人だったのに対し、平成 28 年度には学部留学生数が 72,229 人に達し、前年度比 7%増となっている。このことから、多くの留学生が大学の学部で学んでおり、今後も増加する傾向にあると推測できる。

日本の大学で学ぶ学部留学生の増加に伴い、彼らは大学で多様な言語、文化に接触すると考えられるが、このような接触場面では、有意義な生活を体験する一方、さまざまな困難にも直面すると思われる。ゆえに、彼らが大きな挫折なく学業を全うし留学の成果を得て卒業できるようサポートするためにも、学部留学生に着目した実証的研究が喫緊の課題であると思われる。

そこで、本研究では、中国人学部留学生を調査対象者とし、彼らの入学時から現在まで、学内外でどのような参加場面を経験し、どのような困難に直面し、問題解決にどのようなストラテジーを駆使しているのか、さらに、この一連の学びのプロセスの中でどのような変容を果たしたかを追究した。これらの研究課題の解明により、学部留学生のアカデミック能力の向上に役に立つ提案ができるのではないかとと思われるからである。

まず、学部留学生に関する先行研究を概観し、学部留学生が抱えている困難、学びとその変容、学外での参加という三つの観点から文献整理を行った。学部留学生が抱えている困難は、藤井・門倉 (2003)、藤井 (2012)、村上 (2002)、菅長・中井 (2017) などが明らかにしている。学部留学生の学びを通しての変容についての研究には八若 (2007)、道端 (2016)、三代 (2009) などがあり、コミュニティ形成とその参加の実感がいかに重要であるかが主張されている。学部留学生の重要な学びの場としてアルバイトに従事する過程(村上 2015、中山 2011、菅長・中井 2017 など)があり、アルバイトで多種多様で貴重な学びを得ていることが指摘されている。ただし、これらの研究は学内での学びもしくは学外での学びに限定されており、学部留学生の学内外の参加を通じた学びを総合的にみた研究は、稿者が調べた限り見当たらなかった。そこで、稿者は学部留学生の学内外での学びを総合的に調査・分析した。

本研究では、調査協力者 8 名に対し、一人 40 分から 1 時間の半構造化インタビューを行い、質的データ分析法(佐藤 2008)を使って分析を行った。

まず学内の参加を通じた学びを、「来日経緯」、「大学生活への期待と不安」、「学習面の困難」、「ゼミでの活動」、「大学内での日本人との交流」、「問題解決方法」、「自己評価」という 7 つのカテゴリーに分けて分析した。その結果、「来日経緯」については、日本大衆文化への興味、日本での体験希望が理由で日本への留学に至ったことがわかった。「大学生活への期待と不安」については、各国の友達を作りたいこと、部活への参加、専門知識の獲得などである。特に日本人の友人作りに期待が大きいことが分かった。一方、日本人の友達が作れるかという不安の声もあった。「学習面の困難」については、授業、レポートと発表に困難を感じていることが確認された。「ゼミでの活動」で困難な点として特に挙げられたのは、論文の執筆と発表の二つである。「大学内での日本人との交流」については、特に日本人の友達を作ることと、日本人とコミュニケーションをとることが困難だということが確認された。「問題解決方法」については、特に積極的に授業に参加する、インターネットで資料を探す、また積極的に日本人と会話をするが多く挙げられた。自己評価については肯定的評価と否定的評価に分かれた。肯定的評価は、専門知識の獲得、日本語能力の向上と自信がついたということが良い評価につながった。否定的評価は、主に日本人との交流に対する不満と、日本語のコミュニケーション能力の不足によるものと分かった。

次に、学外の参加を通じた学びについて分析した結果、「アルバイト先での困難な点」、「問題解決方法」、「アルバイトで学んだこと」、「日本での生活体験」という4つのカテゴリーに分かれた。「アルバイト先での困難な点」については、特に業務内容を覚える、相手に何かを説明する、また日本語の問題が挙げられた。「問題解決方法」については、他人に尋ねる、先輩を見習う、言い換えるなどの方法を使って問題を解決することが分かった。「アルバイトで学んだこと」については、日本語コミュニケーション能力の向上、日本人との交流機会の増加、業務内容の学びなどが挙げられた。「日本での生活体験」については、日本で旅行をする、祭りに参加する、企業インターンシップに参加することが確認された。

各カテゴリーの項目を総合的に考察した結果、学内外の学びの変容は以下の3点にまとめられた。

1. 学び方と問題解決能力の向上。学部留学生は困難に直面した際に、あきらめずに、問題解決方法を自ら探すことが分かった。
2. 日本語能力の向上。学部留学生は、何らかの活動に参加し、そこで日本語を運用することを日本語の上達につなげていることがわかった。
3. 異文化適応能力の向上。学部留学生は様々な活動に参加し、日本の社会の一員になることに努めていることが分かった。

今後の課題としては、学部留学生の1年から4年の学習を縦断的に調査することを挙げたい。また、学部留学生だけではなく、日本人学生にもインタビュー調査をする必要があると思われる。学部留学生が大学内外での学習生活をより充実させて過ごせるようになるには、さらなる研究が必要である。

参考文献

- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
- 菅長理恵・中井陽子 (2017) 「エピソードから探る学部留学生の困難点と克服方法 ―予備教育の果たすべき役割―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』(43) pp.65-80
- 中山亜紀子(2011)「学部留学生対象の日本語教育を考える―中国人男子学生のライフストーリーを通して―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3、pp.78-85
- 藤井桂子(2012)「留学生は何に困難を感じているか―2003年と2012年のアンケート調査結果から―」『ときわの杜論叢』(1), pp.145-171
- 藤井桂子・門倉正美(2003)「留学生は何に困難を感じているか―2003年度前期アンケート調査から―」『横浜国立大学留学生センター紀要』(11)、pp.113-137
- 道端輝子(2016)「留学生が意味づけた「日本語」とその変容プロセスに関する考察」『「評価」をもって街に出よう―「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』宇佐美洋編 pp.87-106
- 三代純平 (2009)「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び―韓国人留学生のライフストーリー調査から―」『早稲田日本語教育学』6、pp.1-14
- 村上京子(2002)「大学教育と日本留学試験(1)―学部留学生の大学生活における日本語運用上の困難」『「日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ」科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果中間報告書』 pp.47-62
- 村上律子(2015)「学部留学生の社会参画の過程における言語管理―アルバイト場面でのインターアクションを中心に―」『千葉大学大学院人文社会科学科研究プロジェクト報告書』292、pp45-54
- 八若壽美子(2007)「韓国人学部留学生の日本語学習における自己評価の変容」『筑波大学留学生センター紀要』5、pp41-52

平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果

(http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html)2017.9.5

閲覧

平成 28 年度外国人留学生在籍状況調査結果

(http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2016/ref16_03.html)2017.9.5 閲覧